

第一章

おくれた生徒たちの「曹長」印の鋼のペンから、紫色のインクの最後のしずくが練習帳の格子縞のペーじのうえに吐きだされていた。四時を過ぎていた。というのも校長のマルキ先生が月末の成績表を渡しおえて出て行ったところだったから。ストーヴの火は消えつきようとしていた。教室のなかは、霧氷のついた窓ガラスのそばでも暖かだった。

雪のつもった校庭からくる冬の静けさのために鈍くなった生徒たちは、添削された練習を書き写し終えるところだった。がっしりした体格で縮れた赤毛の教師は生徒たちを眺めていた。まもなく授業はおわって、木底靴や木靴の音を立てての下校となる。

「さあ、終わったか」「はい！　まだです！　もうすぐです。待って、センセー！」などの叫び声が重なり合い混じり合った。若い教師は平らにした定規で自分の机をかるく三度たたいた。「もういい。べ

ンを置きなさい。よし、では僕の言葉を聴いてください」沈黙が列から列へとひろがった。教師は立っていた。

彼は外套掛けからランバージャケットをとって、体に引っかけた。擦りきれた革のきしめる音がした。「さあ、今から、つまりただちにという意味だが、僕は行く」話し始めながら、彼は教科書を丁寧にそろえて数冊ずつ積みかさねた。彼は言葉をさがす。「だが単に今日の午後だけではない。そうじゃない……」十歳ほどの生徒たちは、教師を目で追っていたのだが、不審に思つて互いに顔を見合わせた。「いいや、明日も、これからずっと他の日も……僕らはもう会うこともないだろう。僕が君たちに授業をすることはしない。そういうことだ。僕は君たちの教師ではなくなる。行かなければならないのだ」

二秒ばかりシンと静まりかえつたあと、「なんで！」という最初の叫びがはじけた。それからすぐにいくつもの縫ちれあつた質問がとびかつた。「でもなんで」「どこに行くんです」「なぜ発つ」「誰がしてくれるんです、授業は興奮した劣等生たちは思いきつて、「しめた！ しめた！」とわめきはじめ、彼らの苦痛のものであるノートブックを音をたてて手荒くたたんだ。何冊かは机からおちた。一冊は羽ばたく紙翼の音をたてながら空中を数列とびこえた。二、三冊がそれにつづいた。「静かに！ 聴きなさい。静かに。あまり大声では話せないのだから」教師は毛皮のマフラーを首にまいていたし、その丸っこい頬はすでにいつもより赤みをおびていて、子供たちの目にはもつと親しみやすい様子だった。教師は子供たちに似はじめていたのである。

彼はもう一度扉の方を見て、それから視線を彼らにもどした。そのかすかな謀はかりごとの物腰、その分かち合う秘密の予告とでもいった調子に気づいて、誰の頭も動かなくなつた。彼はランバージャケットの

ポケットから一枚の印刷物を取りだし、これを広げてパチツとはじき、指先でつまんで生徒たちの前で軽くふった。彼らを証人に見たてるのだった。

「よし。君たちは義務的労働奉仕への徴用のことは聞いているな」子供たちは知っていた。「君たちはマキ団のことは聞いているか」これもまた知っていた。中央の壁にかかった大きな額縁に入っている写真のペタン元帥(三)には、これらの言葉も、クラスの生徒たちの身震いもまったく何も聞こえないようだった。元帥はその穏やかな青い眼差しでフランスを見下ろしていた。円筒帽、白い口髭、いくつもの星章、そして額縁の下には「祖国の救い主」なる銘をかかげた細長い布。児童たちは、クラスの熱気のかではじめて高々と発せられる「マキ団」という言葉を、すでに立ち去ろうとしている先生の前で聴いているのだった。「わかるな。僕はドイツに向かう気はない。論外だ。ドイツ人のために働きたくもない。そこでだ。僕はマキ団をえらぶ」だから彼は明日は来ないのだ。明後日もそのあとも。戦争はとも長引くのだから。それでも教師は彼らにまた会いたいと願っている。彼は寂しげに微笑みながらつくくわえた。「あと三年か四年たったとき、僕らはみんなどこにいるのだろうか」じっさい、三年、四年という期間は十歳の年齢の少年たちには理解をこえる際限のない謎だった。

とつぜん、もう少し目を輝かせて教師は急いで帽子をかぶった。「いや、動かないで。僕がまずでて行く。君たちより五分前に。だけど僕は君たちに僕の決断をどうしても自分で知らせたかった。別れを告げたかった。僕は君たちを愛していた。分かっているね。五分たったら、ベルの合図で普段どおりにでてゆきなさい。よろしいか」彼はすでにドアのまえに来ていた。帽子、胴にびつたりの革のジャケット。もうほとんど、凍てつく森の中の一人のマキ団員の姿だった。少年たちとおなじように赤い頬、熱

つばいぬれた目。彼は子供たちをもう一度見つめた。そして扉は閉まった。

仰天だった。それはすぐに興奮に、そしてざわめきに変わった。一人の生徒が身をおこして腰掛けのうえに立ちあがった。クラスの最上級生のバリユだった。これはもともと無鉄砲な生徒で、中庭での元気者だった。彼は黒い上つ張りをきていた。厚ぼったい靴下のうえで膝小僧は丸出しになっていた。バリユは軽機関銃でまわりを撃ちまくる男をまねた。「タッタタッタタッタッ！」もう一人が机のうしろに身を隠してこれに反撃するふりをした。想像上の射撃が交叉しはじめた。

おそらく重傷を負ったのであろう、一人の生徒が「フランス万歳！ くだばれドイツ野郎！」と叫びながら机に倒れかかった。別の一人が冷ややかに言った。すごい言葉だった。「ペタンのせいだ！ おまえが死んだのは！」さらにもう一人がこれを補足した。「先生が辞めたのはペタンのせいだ」そこで革命的で罰あたりで腕白で、その大胆さに酔った言葉がほとばしった。「くたばれペタン！」という言葉だった。バリユの威勢に他の者たちは負けた。彼は言った。「みんなでこのゲス野郎に小便ひっかけるぞ！」

机が脇に押しやられた。小さな大将はその上に乗って額縁をはずした。元帥の写真は左右に揺れ、最後に揺れてストーヴのそばに落ちた。リーダーは机から肖像のうえに飛び降りた。底の堅い木底靴をはいた両足をそろえて着地した。ガラスの割れる音。獲物の奪い合いがはじまった。彼らは薄いガラスをぶっ飛ばし、口髭を、写真の肉を大気にさらした。堂々としたバリユは、——そう、いつだって彼女の——、真っ先に肉のピストルを取りだした。「沈黙！ やるぞ！」多くの目が、開いたズボンの前開きに向けられるのを待って、彼は実行した。尿はあふれて、ストーヴの底の方にむかってうねうねと流

れ、熱くなった保護用板金の上にたまって、湯気をたて、特有の臭いを発散しはじめた。

「俺だ！ 今度は俺だ！」第二の志願兵がすでに抜いたピストルを構えていた。だから、大きなピロイドの目をした、はにかみ屋で黙りがちのジャノ（三）も今はもう我慢できなかった。彼が何年間も学校を休んだので、その埋め合わせに毎週彼の家に特別にやってきて補習授業をやってくれる先生が、彼はとても好きだった。少年はボタンを外して、去っていった先生への愛着から興奮と先例とに誘われて、下に落ちた肖像のまわりにできた復讐者たちの輪に加わった。連帯した彼は、自分の番になって、自分の男子としての戦闘用のチンチンをひっぱり出した。そして仲間の肩に肩をくっつけ、真剣に、フランス国元帥の目をじっとみつめながら、みんなと一緒に心と力をこめて偉大なる国家元首の肖像のうえに小便をかけた。何という気持ち良さ！ こうしてみんなそろってフランス国の恩人にひりかけている時、その一人が、学年度の初めに覚えなければならなかったあの詩句を気取りに気取って唱えはじめた。

ついてゆこうぞ、元帥はそこ大道に立ち、

金の冠三つのついた赤い円筒帽をばかぶりたり。

その高き背丈にて迷いを見おろし、

また慈父の声にて我らをささえる。

ついてゆこうぞ、すべての道を、何があろうと。

他の児童よりも少々詩人でひょうきんな者が、その朗誦の言葉をさえぎってわめいた。「放りまくろ

うぞ！　すべての穴で、何があるうと！」もう一人は、興奮のあまり冒瀆の行為におよび、性器を指でにぎって前につきだし、覚えさせられた国歌、彼らが国民の祝日に慰霊碑のままで気を付けの姿勢で歌わされる国歌を歌った。すぐに、写真の上でとび散る尿の噴射のなかで、「元帥よ、我らはここに」が湧きあがった。それこそ子供っぽいヒステリーから迸ほとばしったのだから、彼らにしては真心のこもった歌だった。

このびしょ濡れの偶像破壊のさ中にベルが鳴りわたった。我勝われがちに小便をたれた者たちは気が狂ったかのように飛び出して行き、他の者たちは大慌てに慌てて前ボタンをかけた。最後に残った者たちは自分の所持品を集めたが、水溜まりを前にして恐れをなし、それを吸い取らせるために、火のそばのバケツから冷えた灰をつかみ取って上から振りかけた。床には、年老いたスパニエル犬の虚ろな眼差しをした公式の肖像がのこった。壊れ、しっこにまみれ、汚されて。

今やジャノは、開いたままの戸から振り返って、混じり合ったガラスのかけらや溜まった尿、黒く凝集したどろどろの灰をもう一度みる。帯状の汚物と破片のあいだから、復讐のえがらっぽい臭気の中で、円筒帽の先端と口髭の数本の毛、皺クチャになった星がまだ見える。それから彼は走りだし、中庭を横切り、すでに外にでて門の片隅にたっていたマルキ先生からできるだけ離れたところを通り、家へとむかうながい下り坂を全速力で駆けおろる。坂のしたの小さな映画館——そこでは、『ユダヤ人ズエッス』の裂けたポスターが風にはためいている。彼は両親と一緒にそれを見に行ったけれども、まったく何も分からなかった——の前にある給水・洗濯場には、この小さな町に残っている最後の雌牛たちが、小屋にもどる前の水飼いのためにいつものように連れてこられていた。そのうちの数頭は歩道の上に排

尿していて、元帥の上からと同じように湯気が立ちのぼっていた。

ほどなくして、彼は水嵩みづかきの増した急流のように家のなかにはいり、台所で家事をしていた母親のほうへとつっぱしり、途中で、高い棚の下のくぼんで避難所となっていた片隅——そこで彼は毎晩、ランブの明かりで勉強をしていた——にランドセルを放りなげて、母の方に走り寄り、威厳たつぷりの口調で言った。「母さん、母さん、先生がマキ団に入ったよ！」それから一息ついて、その効果を確信してこう言った。「で僕ら、元帥にしっこをかけたんだよ！」本物の戦争が始まろうとしていた。